

《そ の 他》

健常児が、配慮を必要とするこどもとつながることに関する文献検討 — 健常児側へ周囲の大人からのアプローチの考察 —

木 田 優 子¹⁾, 齊 藤 史 恵¹⁾

要旨：近年行われているインクルーシブ保育・教育は、障がいのある、なし、などにかかわらず、誰もが個々の違いや個性を認め合いながら共に育ち、学ぶことを目指している。研究目的は、健常児と、配慮を必要とするこどもがつながる現状とアプローチを明らかにすることで、今後の課題を導き出し、求められる健常児の成長・発達への実践、および研究の方向性を検討する資料を得ることを目的とした。

結果及び考察として、こどもたちがつながるとして、「こどもたちがつながるためには段階を経る必要性」、「同じ空間で過ごすことができるための環境を整える必要性」、「こどもたち個々の気持ちを理解し尊重する」および「健常児の未熟性による理解の難しさ」の4つが抽出された。健常児は、関係構築した周囲の大人の支援により、自身と配慮を必要とするこどもとの違いを認めることができる。また、健常児の理解を促していく支援が、成長・発達過程の中で途切れることのないよう、周囲の大人の支援の継続は必要である、と示唆した。

キーワード：インクルーシブ教育、統合保育、健常児、配慮を必要とするこども、つながる

I. はじめに

小児看護の対象は、新生児から青年期までのこどもであり、入院している以外にも健康に何らかの障がいを抱えながら地域で生活しているこどもを含めた、すべてのこどもである。小児看護の役割の1つとして、成長・発達の過程にあるすべてのこどもが、健全な成長・発達を遂げられるような関わりを行う¹⁾、としている。

2005年施行された発達障害者支援法の目的として、発達障害がある児への就学前の早期支援の必要性が挙げられている²⁾。また、2013年施行された障害者総合支援法は、全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に資すること³⁾、としている。

文部科学省の特別支援教育の在り方に関する特別委員会の報告では、共生社会の形成に向けて、障害のある子どもが、地域社会の中で積極的に活動し、その一員として豊かに生きることができるよう、地域の同世代の子どもや人々の交流等を通して、地域での生活基盤を形成することが求められている⁴⁾、と述べられている。障がいのあるこどもとないこどもが共に育つことは、対人的な援助をしようとする思いやりの心を持ち、自発的な行動に移すことにつながる。近年行われているインクルーシブ保育・教育は、障がいのある、なし、にかかわらず、誰もが個々の違いや個性を認め合いながら共に育ち、学ぶことを目指している。こどもたちと日々共に過ごす周囲の大人は、すべてのこどもが共に育ち、学ぶことができるために、障がいのある、なし、にかかわらずすべてのこどもたちへの支援

1) 弘前学院大学看護学部

連絡先：木田優子 〒036-8231 青森県弘前市稔町20-7

TEL：0172-31-7100, FAX：0172-31-7101, E-mail：kida_y@hirogaku-u.ac.jp

受理：2024年2月26日

が必要である。

今まで、障がいのあるこども、気になるこども、配慮を必要とするこどもに対する教師、保育士からの支援に関する事例研究が多い。古野らは、これまでの研究では、あくまでも保育者の視点で検討された点が多数あるが、障害児を取り巻く健常児が、どのように障害児をとらえ、かわりをもつのかという点については数が少ない⁵⁾、と報告している。また、健常児は、配慮を必要とするこどもの理解を促進されるような教育がされなければ、自身の接触経験や周囲の大人の対応を見て、配慮を必要とするこどものイメージを形成した場合、配慮を必要とするこどもへの関わりが消極的になりやすく、不公平感をもつことが考えられる⁶⁾。このことが、小児期の成長・発達段階の中で続くことがなく、双方のこどもたちがつながるためには、健常児側へ周囲の大人からのアプローチは不可欠である。

健常児と、配慮を必要とするこどもがつながる現状と課題を明らかにすることは、今後求められる健常児と、配慮を必要とするこども、それぞれの成長・発達への実践を導き出し、今後の看護学的な示唆を得るものとする。

II. 研究目的

健常児と、配慮を必要とするこどもがつながる現状とアプローチを明らかにすることで、今後の課題を導き出し、求められる健常児の成長・発達への実践、お

よび研究の方向性を検討する資料を得ることを目的とする。

III. 研究方法

1. 文献検索

本研究では、2005年の発達障害者支援法施行後、健常児と、配慮を必要とするこどもがつながることに關する内容を明らかにするため、和文献に限定し、検索を行った。医学中央雑誌 Web 版を用いて、検索ワードを「インクルーシブ教育」、「小児」、「原著論文」で74件、「インクルーシブ」「統合保育」「小児」「原著論文」で2件の文献が、それぞれ抽出された（文献検索日:2023年11月17日）。また、Google Scholar を用いて、検索ワードを「インクルーシブ」、「統合保育」、「小児」、「原著論文」で40件の文献が抽出された（文献検索日:2023年11月20日）。

これらの文献から研究目的に沿ってハンドサーチを行い、重複タイトル・論文、また文献検討及び文献レビューのものを除外、2005年以降のものとした。そして、抄録及び要旨から、こどもたちがつながることに關する内容記載がないものを除外し、16件とした。各文献内容を精査し、引用参考文献から関連する文献5件の内容を精査した後、2件を追加とし、計18件の文献を対象とした。

対象となった文献一覧を表1に示す。以下、文中の文献①～⑧は表1の対象文献番号を示す。

表1 対象文献一覧

番号	研究者名	文献名	発行年	掲載誌	対象児 (配慮を必要とするこども及び健常児)	研究方法	研究目的
①	渡邊雅俊	通常学級に在籍する発達障害が疑われる児童生徒における仲間関係の実態	2010	教育実践学研究, 15, 173-183.	質問紙調査 ・大学生203名 事例研究 ・発達障害児の小学6年生K君 ・周囲児4名	質問紙調査 事例研究	発達障害児の仲間関係について、実態とその背景を明らかにする
②	荒川哲郎 他	地域の通常学校で医療的ケアを要する子どもが学ぶ意味	2012	三重大学教育学部研究紀要, 63, 371-377.	・医療的ケアを要する子ども、小学1年生の莉歩さん ・まわり子どもたち	事例研究	医療的ケアを要する子どもが地域の学校で学ぶ教育的意味を考える
③	浜谷直人 他	特別支援対象児が在籍するクラスがインクルーシブになる過程-排除する子どもと集団の変容に着目して-	2013	保育学研究, 51(3), 45-56.	・特別支援対象児の年長M児（知的発達面の問題はなし経験不足による言葉の遅れ） ・支援児R児	事例研究	排除する子どもと集団の状態・変化を分析し、保育実践がインクルーシブになる諸相を明らかにする

番号	研究者名	文献名	発行年	掲載誌	対象児 (配慮を必要とするこ ども及び健常児)	研究方法	研究目的
④	大嶋絹子 他	医療的ケアを必要とする児と共に学ぶ児童における支援の行動への影響	2014	小児保健研究, 73 (1), 59-64.	・ 公立小学校に通う 4 年生児童 ・ 気管切開と経管栄養, 常時車いす使用し, 全介助を必要とする児童	質問紙調査	医療的ケアを必要とする児童と常に共に学校生活を送ることが, 健常児童の他者への支援の行動にどのように影響するかを明らかにする
⑤	荘司紀子	統合保育における発達支援のあり方についての一考察—アスペルガー症候群と診断された幼児の他者とのつながりを通して—	2015	青山学院女子短期大学紀要, 69, 151-164.	・ 5 歳児クラスに所属するアスペルガー症候群の A 児 ・ 同じクラスの子どもたち	事例研究	A がクラスの中に位置づいていく「他者とのつながり」がもたらす意味を明らかにすることによって, 統合保育における発達支援のあり方を探る
⑥	古野誠生 他	統合保育の遊び場面における, 障害児と健常児の社会的相互作用についての考察	2015	純真紀要, 55, 81-93.	・ 高機能広汎性発達障害の 5 歳 11 か月児 ・ 健常児	事例研究	保育者の介入が少ない自由遊び場面において, 障害児と上手に関係を保つことができる健常児のかかわり方やアプローチ法を明らかにする
⑦	青井倫子 他	特別な配慮を必要とする幼児に対する健常児の理解や態度の形成—社会教育的視点からの統合保育実践の検討—	2018	愛媛大学教育学部紀要, 66 「幼児教育特集号」, 1-12.	・ 全般的な発達の遅れがある年長児 (超低体重にて出生) ・ 年長の健常児たち	事例研究	加配保育士を配置して統合保育を行っている保育所に身を置き, 継続的に参加観察することを通して, 保育所の日常の保育とその文脈に即して検討し, 幼稚園や保育所において障害児と健常児が共に生活する者として, 仲間関係を成立させ発展させていくための保育のあり方を考察する
⑧	園川緑	インクルーシブ保育における子どもどうしのつながりの場面に関する研究	2019	帝京平成大学紀要, 30, 151-156.	・ 年中児 (ダウン症男児 B, ダウン症女児 C, 運動障害あり女児 D) の 3 名 ・ 同じ年中組の子ども	事例研究	インクルーシブ保育の向上を目指し, インクルーシブ保育の中で子どもどうしのつながりの場面に着目し, 「楽しさを共有していると考えられる場面のプロセス」に関わる要素を捉える
⑨	渡邊久恵 他	健常児と医療的ケア児の統合保育の効果	2019	小児看護, 42 (4), 504-508.	・ 入園時 4 歳 9 か月の医療的ケア児 ・ 健常児	事例研究	医療的ケア児が家族の支えのほか, 在宅看護を受け, その後看護ケアと健常児との統合保育を受け, 目ざましい身体的・精神的な成長・発達の経過を振り返ることにより, 医療看護ケアと統合保育の効果について報告する
⑩	岸俊行 他	“気がかりな子”の在籍する通常学級において一斉授業はどのような特徴を有するのか: “気がかりな子”-教師-他児童の三者の関わりを検討—	2020	教育医学, 66 (2), 130-148.	・ 医師の明確な診断は受けていない対人面・行動面に関して困難さを有している「気がかりな子」小学校高学年の A 児 ・ 小学校高学年の他児童	事例研究	通常学級に特別な支援を必要とする「気がかりな子」が在籍することによる, 教師の教授方略の特徴および教師の教授方略が一斉授業にもたらす影響に関して, その特徴を明らかにする
⑪	横山佳奈 他	統合保育における ASD 児の対人関係の広がりや行動の変化についての検討 第 1 報	2020	小児の精神と神経, 60 (1), 59-66.	・ ASD の 3 歳 A 児 ・ 3 歳児クラスの子どもたち	事例研究	統合保育の場面での ASD 児の対人関係の発達における保育者・他児の役割や, ASD 児・他児・保育者の 3 者間関係の変化を, 一つの事例を通して明らかにする

番号	研究者名	文献名	発行年	掲載誌	対象児 (配慮を必要とするこ ども及び健常児)	研究方法	研究目的
⑫	広瀬由紀 他	対人面に配慮を要 する子と周囲の子 との関わりの変容 過程-特性も踏ま えた上で仲間とし て互いに無理なく 過ごせるまで-	2020	保育学研究, 58(2・3号 合併), 105- 117.	・知的障害の診断を受 けている, 対人面に配 慮を要するソウタとリ ク ・4～5歳児クラスの 子ども	事例研究	特別な配慮の有無にかかわ らずその子らしく過ごせる よう保育展開する中で特別 な配慮を要する子に対し, 周囲の子たちから「声をか ける・働きかける」「同じ 動きをする」行為に着目し, 行為が生じる背景や要因お よび特別な配慮を要する子 への関わりを社会的実践の 文脈から検討・分析する
⑬	向出章子	知的障がい児のコ ミュニケーション 支援についての検 討-交流学級にお けるダンス・ムー ブメントセラピー 的アプローチを通 して-	2021	ダンスセラ ピー研究, 13(1), 39- 50.	・知的障がいのある小 学校4年生A ・交流学級の児童	事例研究	コミュニケーションに困難 を示す知的障がい児とその 交流学級の児童を対象に D/MT的アプローチを行 い, 知的障がい児と児童た ちとのコミュニケーション 行動を分析し効果を検証す る。そこから, 学校教育に おけるD/MT的アプロ ーチによるコミュニケーション 支援の意義を検討する
⑭	小柳津和博 他	インクルーシブ保育 における子ども同 士の関わり合いを 促す保育者の専門 性-重症心身障害 児を含む集団に着 目した質的研究-	2022	リハビリテ ーション心理学 研究, 48(1), 51-63.	・重症心身障害児(身 障害者手帳1種1級, 療 養手帳A判定)の幼児 3名 ・同じ保育施設利用児	事例研究	インクルーシブ保育におい て子ども同士の関わり合い を成立させるために必要と なる保育者の専門性につ いて, 実際の保育場面を分析 することで明らかにする
⑮	新家彰子 他	通常学級に通う人 工呼吸器装着児に 関わる同級生の思 い	2022	小児保健研 究, 81(3), 225-234.	・通常学級に通う中学 生の人工呼吸器装着児 ・同じ中学校の障害の ない生徒	面接調査	障害のない生徒が通常学級 に通う人工呼吸器装着児と 出会う時, および関わる際 の思いについて明らかにす る
⑯	岡部帆南 他	学級雰囲気は通常 の学級に在籍する 発達障害の可能性 のある児童に対す るクラスメイトの 認知と働きかけに 与える影響	2022	LD研究, 31(3), 223- 233.	・発達障害, その可能 性のある児童(質問紙 上の登場人物) ・発達障害のある児童 が在籍している小学校 4～6年生の児童	質問紙調査	学級雰囲気が発達障害の可 能性のある児童に対するク ラスメイトの認知と働きか けに与える影響を検討する
⑰	松下浩之 他	小学校通常学級に おける社会的相互 作用の促進に関す る研究-自閉症ス ペクトラム障害の 児童を含めた学級 集団に対する「あ りがとう」のこと ばかけへの介入-	2022	自閉症スペ クトラム研 究, 20(1), 15-24.	・ASDの小学校3年男 児A ・交流学級に在籍する 児童	事例研究	ASDの児童を含めた学級 全体に対して, 「ありがと う」と伝え合う行動を促進 することにより, 児童全員 の「仲間感」に及ぼす影響 を検討する
⑱	河原麻子	英国の通常の学級 に在籍する盲ろう 児の教科の時間 におけるクラスメ イトとの関わり-英 国の小学校におけ る一事例から-	2022	国立特別支 援教育総合 研究所研究 紀要, 49, 1-12.	・盲ろう児(弱視難聴 児)A児 ・A児のクラスメイト	事例研究	英国の通常の学級に在籍す る盲ろう児とクラスメイト の関わりの実態把握

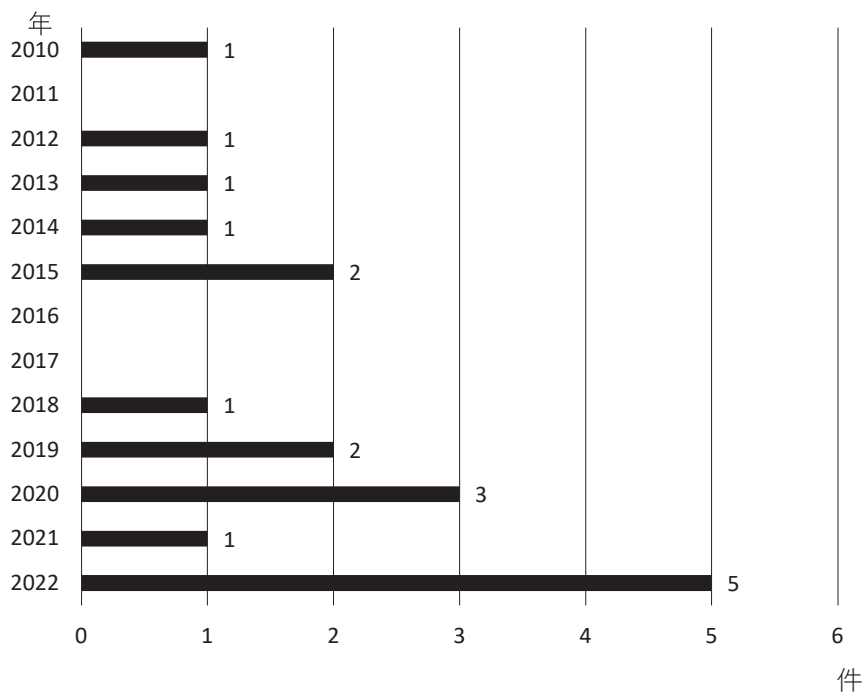


図1 年次推移

2. 分析方法

対象とした18件の文献記述を精査し、内容と年次推移を分類し、分析を行った。記述内容は、研究者の感覚による偏りが生じないよう、抄録や結果および考察、結論に書かれている内容を抜粋もしくは忠実に要約することを心がけた。

3. 本研究における用語の定義

1) 配慮を必要とするこども：対象児の中の、健常児以外のこどもである自閉スペクトラム症（以下、ASD とする）、発達障害（疑いも含む）、アスペルガー症候群、高機能広汎性発達障害、医療的ケアを必要とする子ども、知的障害、対人面・行動面に困難さを有している、特別支援対象児、盲ろう児、ダウン症候群、全般的な発達の遅れ（超低出生体重児）、重症心身障害児、運動障害ありのこども、とした。障がいの表記について、筆者が使用する場合は「障がい」、対象文献または引用文献にて既に使用されている場合は「障害」とする。

また、こどもの表記について、筆者が使用する場合は「こども」、対象文献または引用文献にて既に使用されている場合はそのまま引用する。

2) つながる：広辞苑では「離れているものが一続き

になる。つらなり続ける」⁷⁾としている。ここでは健常児と、配慮を必要とするこども、すべてのこどもが「つながり続ける」、とする。

IV. 結 果

1. 対象文献の基本的情報（表1）

対象文献の一覧は、表1のとおりである。保育・教育系14件で実践報告が多くみられ、看護系3件、心理系1件であった。

1) 発行年次推移（図1）

対象文献の発行年次推移は、図1のとおりである。2005年から2009年までの文献は抽出されず、2010年以降から毎年0～5件の文献が抽出でき、発行年によってばらつきが見られた。また、発行年次の推移においては2019年以降、研究件数が増加傾向にあった。

2) 対象児の発達段階の区分（図2）

対象児の発達段階の区分は、図2のとおりである。文献①は複数の研究方法で対象児の発達段階区分が異なるため、複数件数となっていた。内訳は、幼児期9件、学童期8件、思春期はそれぞれ中学生、大学生を対象としており、2件であった。幼児期は、年少から年長クラスに所属するこどもたちであった。

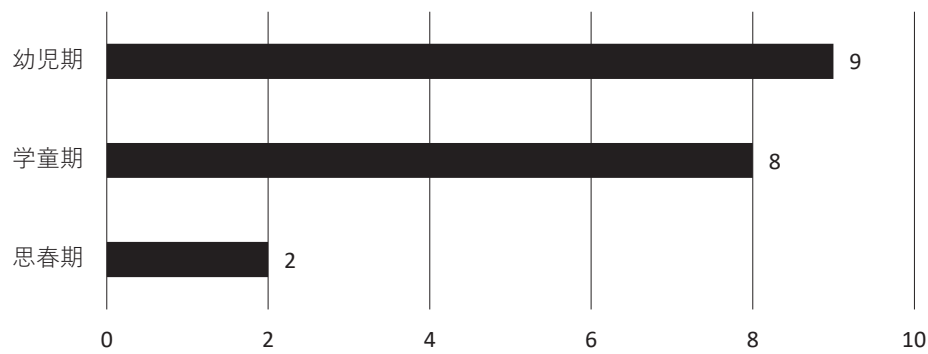


図2 対象児の発達段階の区分 (複数件数)

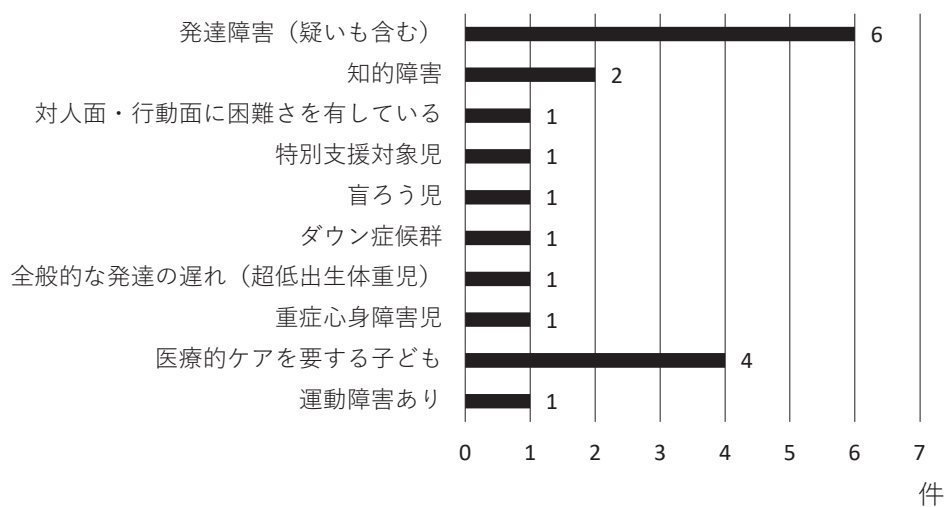


図3 配慮を必要とするこども (複数件数)

3) 配慮を必要とするこども (図3)

対象児の中の配慮を必要とするこどもは、図3のとおりである。対象文献から語句を引用したため、診断名や子、児が混在している。内訳は、発達障害 (疑いも含む) 6件、医療的ケアを必要とする子ども 4件、知的障害 2件、そして対人面・行動面に困難さを有している、特別支援対象児、盲ろう児、ダウン症候群、全般的な発達の遅れ (超低出生体重児)、重症心身障害児、運動障害あり、がそれぞれ1件、計19件であった。文献⑧の配慮を必要とするこどもは、それぞれダウン症候群と運動障害ありのこどもがおり複数件となったため、計19件となった。発達障害 (疑いを含む) が一番多く、その内訳は、ASD 2件、発達障害とその疑い 2件、アスペルガー症候群 1件、および高機能広汎性発達障害 1件であった。

4) 対象文献の研究手法 (図4)

対象文献の研究手法は、図4のとおりである。対象文献の研究手法は、事例研究が15件と一番多く、質問紙調査 3件、面接調査は 1件であった。文献①では、対象者が思春期である大学生には質問紙調査、学童期である小学生には事例研究を行っているため、複数件数となった。

事例研究は、幼児期 9件、学童期 6件であり、対象児が幼児期の場合、すべてが事例研究であった。質問紙調査は、思春期の大学生 1件、学童期 2件であった。面接調査は、思春期の中学生 1件であった。

2. こどもたちがつながることに関する結果

対象文献の記述内容から、こどもたちがつながるための介入者として、周囲の大人である保育士や教師 (以

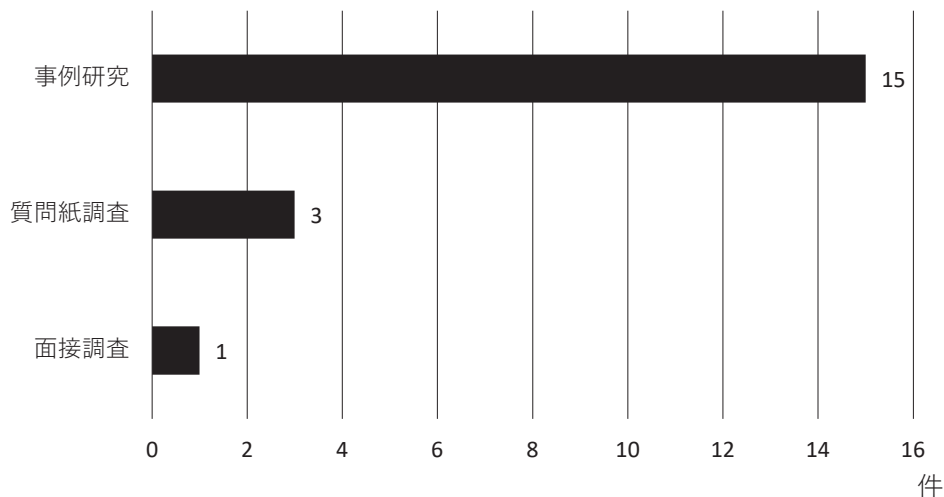


図4 対象文献の研究手法（複数件数）

下、周囲の大人とする）、また以前から配慮を必要とするこどもと社会生活を過ごしている同年代の健常児が挙げられた。

こどもたちがつながることに関する内容としては、「こどもたちがつながるためには段階を経る必要性」、「同じ空間で過ごすことができるための環境を整える必要性」、「こどもたち個々の気持ちを理解し尊重する」および「健常児の未熟性による理解の難しさ」の4つが抽出された。

1) こどもたちがつながるためには段階を経る必要性

周囲の大人は、健常児と、配慮を必要とするこどもがつながることができるような段階を作り、経ていた。まず、周囲の大人は、健常児と、配慮を必要とするこどもが直接関わる前に、配慮を必要とするこどもと二者で過ごす時間を作り、互いの関係構築をしていた。その上で、同じ空間で過ごす複数の健常児と、配慮を必要とするこども、周囲の大人の三者で一緒に過ごし、健常児と、配慮を必要とするこどもそれぞれの関わりモデルとしての役割を担っていた。三者で過ごす時間の中で、健常児は、周囲の大人の介入により、配慮を必要とするこどもを受け入れ、つながることができた。

文献⑪では、ASDの3歳児の初期の人間関係は、保育士に依存したものであったが、保育士との関係が構築され安定化していくにつれて、3歳児クラスの子どもたちとの関わりが増加していた。また、文献⑦⑮では、健常児が、配慮を必要とするこどもの気持ちや関わり方に気付くきっかけは、周囲の大人や、以前から配慮を必要とするこどもと過ごしている同級生が

ロールモデルとなり、共に過ごすことであった、と報告されていた。健常児が、配慮を必要とするこどもを受け入れることができるようになるために、保育士は、健常児と、配慮を必要とするこどもとの関係をつなぎ、日頃の保育の場面においては細かい配慮をしていた、と述べられていた（文献⑥）。

周囲の大人が考えた段階を経ていくことにより、健常児、配慮を必要とするこども、それぞれが互いを理解しようとし、他者へ関わる行動が見られるようになった。文献⑫では、4～5歳児クラスの子どもたちは、対人面の配慮を要する子との関わりの積み重ねの中で、相手の変容のみを求めるのではなく、自分が相手を理解しようとしたり、伝達手段を工夫したりする必要性があることを学んでいた。文献⑨では、4歳の医療的ケア児は、少しずつ他児と一緒に保育士の話を聞き活動に参加できるようになると、健常児との仲間意識が芽生え、健常児が泣いているときには心配するように近づくなど優しい態度がみられていた、と報告されていた。

健常児と、配慮を必要とするこどもが、つながることの段階を経ることにより、それぞれに行動変容が見られるようになった。

2) 同じ空間で過ごすことができるための環境を整える必要性

こどもたちがつながるためには、同じ空間で、皆で過ごすことのできるよう環境を整える必要があり、その方法と効果が述べられていた。

健常児と、配慮を必要とするこどもが、同じ空間で

過ごすことができるために、同じ活動を行うことの効果が報告されていた(文献⑬)。知的障がいのある小学校4年生Aの変容の要因の一つとしては、ダンス・ムーブメントセラピーを交流学級の児童とのグループ活動を多く取り入れたことが考えられた。また、健常児である交流学生の児童は、障害理解につながる行動が見られ、教員の指示ではないかかわり方を工夫する様子が見られるようになった、と述べられていた。

また、文献④⑦では、活動を共に行うこと以外としては、健常児と、配慮を必要とするこども、それぞれの互いの視野の中に入る必要性と効果がある、と述べていた。文献⑯では、こどもたちが一緒に過ごす空間の雰囲気は、配慮を必要とするこどもに対する健常児の思いや関わりに影響を与えており、「影響性評価・情動軽減的行動」だけでなく「原因究明・問題解決的行動」の数値も高い学級雰囲気が良好な学級では、発達障害、その可能性のある児童に対する認知や働きかけがポジティブである。健常児は、発達障害、その可能性のある児童に対して複雑な感情を抱きながらも、仲良く活動をするために自分にできることを一生懸命考えたい、もっと知りたいと考えている児童らが多いのではないか、と考察されていた。

そして、こどもたちが同じ環境で過ごすことができるためには、周囲の大人が関わる必要がある、との指摘がされていた。文献⑱では、クラスメイトが盲ろう児やティーチング・アシスタントに関わってきた際に、ティーチング・アシスタントが盲ろう児に質問を投げかけることで、盲ろう児とクラスメイトとの関わりを促していた。しかし、文献⑩では、教師の参与しない一斉授業の中においては、小学校高学年の「気がかりな子」A児と他児童の関係は多くは見られなく、相互行為がみられた事例においても、相互行為の継続性はほとんど見られなかった、と報告されていた。

3) こどもたち個々の気持ちを理解し尊重する

健常児と、配慮を必要とするこどもがつながるためには、周囲の大人はそれぞれの気持ちを把握、理解し、そして尊重し、保障しながら関わる必要がある、と述べられていた。

文献⑧のこどもどうしのつながり場面では、こどもの「やりたい」という気持ちを保育者が保障するところから始まっていた。また文献②では、小学1年生のまわりの子どもたちは、問題解決より、仲間である医療的ケアを要する子ども莉歩さんが困っていることの

方が気がかりなようである。(中略)莉歩さんもまわりの子どもの働きかけを安心して受け入れ、自らの居場所を作っていた、と報告されていた。

以上から、周囲の大人は、子どもの意思を確認・理解・尊重し、子ども同士の生活の中で関わり合いに結び付ける力が必要である(文献⑭)。また、こどもたち個々に合わせることは学級の児童の「仲間感」の向上に寄与する、と考察されていた(文献⑰)。

4) 健常児の未熟性による理解の難しさ

周囲の大人が健常児に対し、配慮を必要とするこどもの診断や状況を伝えることができないこともある。また健常児にとっては、配慮を必要とするこどもへの理解が未熟性により難しい。そのため、健常児の中には、配慮を必要とするこどもに対し、無関心であったり、排除、偏見、哀れみの気持ちを持つこともある、と述べられていた。

文献①では、大学生が発達障害児とのかかわりを回想した記述内容の「回避・防衛」「傍観」を合わせると、7割を超えていた。これらは、発達障害を持つ同級生に対して無関心であったり、意図的に距離を置いたりしていた関係である。この回避や傍観といった態度の形成は、健常児には、発達障害児の障がいが告知されていない不可解さから生じる、関わりへの困惑や抵抗感が一因、と考察されていた。また文献③では、特別支援対象児の年長M児に対し、強い排除の気持ちを持っている支援児R児や、また午睡時など特別扱いを受けるM児に対して不満を持っている子どもがいることも明らかになった。その一方で、M児をクラスに位置づけようとする提案も出て、子どもたちがM児に対して両価的な意識を持っていることがわかった、と報告されていた。そして、健常児が、小児期に重症心身障害児との出会いの経験がない、インクルーシブ教育を受けていない、などにより、大人になって初めて出会う重度の心身障害を併せ持つ児に偏見や哀れみを感じていた、と述べられていた(文献⑮)。

こどもたちに関わる周囲の大人は、健常児が、配慮を必要とするこどもとつながる過程のなかで、回避、傍観、そして排除や不満と思い、表出することもある、と把握をした上で、それぞれのこどもたちに介入する必要がある。

V. 考 察

1. 研究動向

今回、健常児と、配慮を必要とするこどもがつながることの現状とアプローチに着目し、文献検討を行った。

対象文献は保育・教育系の実践報告が多くみられた。近年のインクルーシブ教育・保育また統合保育により、保育所や小学校、中学校などで過ごす配慮を必要とするこどもの増加が1つの要因と考えた。

配慮を必要とするこどもは、発達障がい（疑い含む）が多く6件であった。また、対象児のほとんどが、3歳以降の幼児期と学童期であった。青井らは、発達障害の子どもたちの障害は目に見えにくいいため、その子どもたちが抱える困難さは周囲の幼児たちに理解されにくいという特徴をもつ⁸⁾。また、岡部らは、知的に遅れない発達障害の可能性のある児童生徒は、その障害特性ゆえに、困っていると感じられることや行動の意味を周囲の人に適切に理解されるのが難しいことがある⁹⁾、と報告されていた。こどもたちは、同世代の他児と過ごす中で、自分と他者との違いに気づき、相手を理解していく。そのため、個々それぞれの発達段階を踏まえ、周囲の大人は、健常児の目には見えにくい障がいや、配慮を必要とするこどもの状況・状態について、健常児が理解できるような支援が必要である。

対象文献の研究方法では、事例研究が多くを占めていた。その理由として、対象児の発達段階の区分は幼児期、学童期が多く、研究目的が事例に含まれている現象や事実を明らかにする内容であるため、と考えた。今後、さらに研究内容の一般化を目指すためには、対象児数を増やす、参与観察の継続、他の保育所・学校や地域を拡大しての実施が必要である。

2. こどもたちがつながることの総合的考察

1) すべてのこどもが成長・発達し続ける存在と考え、周囲の大人が支援する

すべてのこどもは、成長・発達過程において、周囲の大人の支援や、共に育つ他児とつながることにより発達が促されていく。古野らは、保育所での子どもの生活において保育者の意図的援助は不可欠であるが、障害児や健常児すべてが子どもにとって人的環境であり、子ども自らがその環境にかかわっていくことで発

達が促され自立や協調が育まれていく⁵⁾、と報告されていた。こどもたちがつながるためには、周囲の大人の支援と健常児、配慮を必要とするこどもそれぞれがお互いを理解する必要がある。

今回の対象児は、3歳時以降の幼児期や学童期が大半を占めていた。青井らは、4歳ごろになると幼児たちは、他者との違いに敏感に気づき、“同じ”か“違う”かに敏感になってくる。自分との違いが大きい障害児の行動や気持ちを理解することの難しさに起因する戸惑いや不安、誤った理解、葛藤などがあることが予想される⁸⁾、と述べていた。また、こどもたちが過ごす保育所や学校という集団生活の場合は、同年代の仲間と交流し、他者との協調性や自己の欲求の統制方法などを学ぶ社会生活の場である。こどもたちの社会生活の場に関わる周囲の大人は、健常児と、配慮を必要とするこどもがつながるための段階を経ることができるよう、それぞれの気持ちを理解し、一人の人として尊重し、健常児と、配慮を必要とするこども、それぞれとの関係構築が大切である。健常児と、配慮を必要とするこどもは、関係構築している周囲の大人に見守られる環境だからこそ、安心して過ごすことができる、と考えた。また、こどもたちと周囲の大人、二者間の関係構築においては、周囲の大人はこどもたちそれぞれに対し、肯定的で丁寧な言葉がけや関わりを行い続けることにより、健常児が、配慮を必要とするこどもとの関わりでの“違い”を感じることは少ないのではないかと、考えた。

また健常児は、関係構築した周囲の大人の、配慮を必要とするこどもへの関わりから、自身が行うべき配慮を必要とするこどもへの関わりを学んでいた。そのため健常児は、関係構築した周囲の大人の支援により、自身と配慮を必要とするこどもの違うところを認めることができるのではないかと、示唆した。

周囲の大人としては、保育士や教師だけではなく、今後はこどもたちの一番の身近な存在である保護者の支援や関係性に視点を向けることで、こどもたちがつながることへの支援が強化される、と考えた。

2) こどもたちがつながるための課題

こどもたちがつながるためには、同じ空間で、こどもたち皆で過ごすことのできるための環境を整える必要がある。こどもたちの環境としての居場所は、お互いの他者理解の場にもなる。また、現在の少子化、核家族化、きょうだい数の減少などに伴い、こどもどう

しの交流の場が少なくなっている状況においては、こどもたち皆に必要である、と考えた。

文部科学省が述べている共生社会の基本的な方向性としては、障害のある子どもと障害のない子どもが、できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきであり、そのための環境整備が必要である¹⁰⁾、とされていた。現在、統合保育からインクルーシブ保育へと変遷してきている。また、インクルーシブシステムの構築には、障がいのある児と共に学ぶクラスメイトの障がいに対する理解の促進が期待されている。インクルーシブシステムは、こどもたちが同じ空間で過ごすことのできる環境となる。

インクルーシブ保育・教育のメリットは、人それぞれに違いがあることを知ることで他児への思いやりや尊重する力を身につけることができる。そして、他児との分離から無意識に作り出される偏見や差別がなくなる。しかし、デメリットとして、周囲の大人の正しい援助がなければ、他児との違いを認められず衝突が生じたり、周囲の大人が配慮を必要とするこどもにつきっきりになりかねない。広瀬らは、特別な配慮を要する子は、周囲の理解、差別や偏見、保育環境そのものが周囲に与える影響は大きい¹¹⁾、と述べていた。また松下らは、社会的スキルの不足はASDなどの特定の子どものだけの問題ではなく、今日の子どもたちにとっての共通の問題になりつつある¹²⁾、と報告していた。健常児にとって、配慮を必要とするこどもは、個別な支援がされているため、不満を招きやすい。健常児は、成長・発達段階の途中による未熟性があることから、個別支援を必要とする他者への理解が難しい。特に、幼児期や学童期は、日々の社会生活の中で他者理解を学んでいる段階にある。配慮を必要とするこどもの中で、障がいが見えにくい（例えば発達障がいなど）こどもが抱える困難さは、健常児である周囲のこどもたちにも理解されにくいという特徴がある（文献⑦⑫）。そのため、こどもたちがつながる過程での難しさは、課題として今後検討が必要である。

また、周囲の大人が健常児に対し、配慮を必要とするこどもの診断や状況を伝えることができないことがある。また健常児にとっては、未熟性により、配慮を必要とするこどもの理解が難しい。そのため、健常児の中には、配慮を必要とするこどもに対し、無関心であったり、排除、偏見、哀れみの気持ちを持っていた。日本弁護士会は、障害に対する差別、偏見、無理解は

「障害」を知らない、知ろうとしないことに由来し、不安を呼び、そして「隠す」「分ける」ことを思いつく、その結果が差別、排除、偏見となる¹³⁾、と述べていた。満田は、実際に大学生は発達障害のある生徒の生きにくさとして、社会のステレオタイプの認識や否定的な関わりを挙げており、学校という教育の場が、発達障害の可能性のある生徒に対する偏見を認識させる環境となる可能性も考えなければならない⁶⁾、と指摘していた。現在、インクルーシブ教育として行われている様々な取り組みは、こどもたちに障がいや、配慮が必要なこどもの理解を促している。周囲の大人は、健常児が、配慮を必要とするこどもを知らないことが、こどもたちがつながるということに影響を及ぼすことを理解したうえで、途切れることのない支援を継続することが必要である。

3) 今回の研究の限界

今回の研究は、文献検討であり、また配慮を必要とするこどもの診断、状態を限定せずに文献検索を行ったため、こどもがつながることに関するプロセスの共有や理解、そして一般化には限界があった。

VI. 今後の課題

今後、研究者がまず現場に入りこどもたちがつながることに関するデータを得ること、保育士や教師など周囲の大人の関わりの実態を調査し、こどもたちの成長・発達に携わる看護職として活かすことのできる実践内容を明らかにしたい。また、健常児と、配慮を必要とするこどもがつながることが、途切れることのない継続された支援方法の具体化を考えていきたい。

VII. 結 語

健常児と、配慮を必要とするこどもがつながる現状とアプローチを明らかにする目的で文献検索を行った。その結果、こどもたちがつながるということに関して、「こどもたちがつながるためには段階を経る必要性」、「同じ空間で過ごすことができるための環境を整える必要性」、「こどもたち個々の気持ちを理解し尊重する」および「健常児の未熟性による理解の難しさ」の4つが抽出された。健常児は、関係構築した周囲の大人の支援により、自身と配慮を必要とするこどもの違いを認めることができる。また、健常児の理解を

促していく支援が、成長・発達過程の中で途切れることのないよう、周囲の大人の支援の継続は必要である。

本研究には利益相反として申告すべき内容は含まれていない。

引用・参考文献

- 1) 奈良間美保, 丸光恵: 系統看護学講座 専門分野 小児看護学〔1〕小児看護学概論 小児臨床看護総論, 医学書院, 第14版, 4-28, 2020.
- 2) 文部科学省 (2016年10月登録): 発達障害者支援法 (平成十六年十二月十日法律第百六十七号). https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/1376867.htm (参照2023年12月20日)
- 3) 全国社会福祉協議会 (2021年4月投稿): 障害福祉サービス利用について 障害者総合支援法. https://www.shakyo.or.jp/download/shougai_pamph/date.pdf (参照2023年12月20日)
- 4) 文部科学省 (2012年9月登録): 特別支援教育の在り方に関する特別委員会の報告 共生社会の形成に向けて. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325884.htm (参照2023年12月20日)
- 5) 古野誠生, 豊辻晴香: 統合保育の遊び場面における, 障害児と健常児の社会的相互作用についての考察. 純真紀要, 55, 81-93, 2015.
- 6) 満田琴美: 大学生は発達障害のある生徒の生きにくさをどのように認識しているか—小・中学生当時の同級生や教師の態度との関連から—. 人間文化創成科学論叢, 18, 49-57, 2015.
- 7) 新村出: 広辞苑. 岩波書店, 第7版, 2018.
- 8) 青井倫子, 曾川理恵: 特別な配慮を必要とする幼児に対する健常児の理解や態度の形成—社会教育的視点からの統合保育実践の検討—. 愛媛大学教育学部紀要, 66「幼児教育特集号」, 1-12, 2018.
- 9) 岡部帆南, 柘植雅義: 学級雰囲気が通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童に対するクラスメイトの認知と働きかけに与える影響. LD 研究, 31 (3), 223-233, 2022.
- 10) 文部科学省 (2012年7月登録): 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告) 概要. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm (参照2023年12月20日)
- 11) 広瀬由紀, 岩田美保: 対人面に配慮を要する子と周囲の子との関わりの変容過程—特性も踏まえた上で仲間として互いに無理なく過ごせるまで—. 保育学研究, 58 (2・3号合併), 105-117, 2020.
- 12) 松下浩之, 浅川清: 小学校通常学級における社会的相互作用の促進に関する研究—自閉症スペクトラム障害の児童を含めた学級集団に対する「ありがとう」のことばかけへの介入—. 自閉症スペクトラム研究, 20(1), 15-24, 2022.
- 13) 日本弁護士連合会 子どもの権利委員会: 子どもの権利ガイドブック, 明石書店, 第2版, 211-227, 2017.